

水主木鈴

イ強いなア、エ、オイ、商人の忤にも彼んな者があゝるから、大阪の商人でも馬鹿に出来ない、ア何しろ長堀橋の轡屋といへば、當時金物問屋では評判が高い、その轡屋の忤だが、今の太勢の武士を取つて投げた勢ひ、恐れ入つたものぢや、威心なものぢやアないか」と噂高々、行過ぎるのを聞いて顔を見合はした例の連中「ハ、アさては彼奴は轡屋五郎右衛門と申す者の忤だナ、ロ、何うかして吾れ、恥辱を受けたこの遺恨を晴したいものである」と言つて口惜しがりましたが、何しろ山本といへる一人が川中へ投込まれて、身体はピツッポリ濡れて居ます、仕様がなからこれに脱ぎまして、朋友の下着を借り、また一人は袴だけになつて羽織を貸してやるといふやうなことで、濡れた衣類を包みにしてこれを携へ、歩いては居られませんから、近傍にて駕籠を雇うて、中之島の淀屋橋、彼の松山の屋敷へ立歸つて参りましたが、これより遺恨を晴さんと色々悪計を運らして、彼の新三郎に害を及ぼさうといふお話に相成りま

すが、一寸一服致します。

第九回

水主木鈴

さてその晩は鈴々口惜しながら寝て了ひましたが、翌日に相成りまして五人の者は、打揃うて安太郎の宅へ遣つて参りました。〇何うだい山本、腹の下痢るやうなことはないか山本イヤ、全く水を飲み過ぎしたか、少々瀉るやうだ、酷い目に遭つた、それに就いて乃公は昨夜中考へたが、何は彼奴が強いと云つたところか、昨日は酔つて居たから彼様な目に遭つたが、五人とも吾々が掛つたら、彼奴一人ぐらゐ遣れぬこともあるまい、が、一つ町人を頼んで見やうと思ふ。〇、山本、當時天満の澁川組に澁五郎といふ、これは町奴であるが、この頃は中屋敷へ出入をして居る、宅は人足の入ればまづ自分は元締といはれて居るのだ、随分他人から物を頼まるれば否やとは云はない今幡随院、こいつを一番頼んで見やうと思ふが、

何うだらう ○ヤッ宜からう 山本「それぢやア一つ頼みに行かう」と
 相談は決まりましたが、併し大勢で揃つて行くといふのも見てもな
 いと云ふので 山本「服部氏、御苦勞ながら君付合うて呉れたまへ服部
 委細心得た」これから山本「安太郎、服部作十郎といふ兩人が打揃う
 て違つて参りました天満橋筋、當今あの小兒の薬を賣る奇應丸の本
 家の宅から少々東に曲りました處で、大きなものでございます、瀧
 川組瀧五郎といふ親分の宅 安太「頼まら 執次「へエ、お出でなさい安太」
 一寸何うか瀧五郎殿に面ひたいので、會はせて呉れるやうに 執次「へ
 エ、何方様でございますか 安太「イヤ、些と姓名は云へない、一寸會
 ひたいので 執次「へエ……エー親方、お武家が兩人來まして、お前
 さんに面ひたいと云つてます 瀧五郎「何處の人だ 執次「姓名は云へぬと云
 ふので 瀧五郎「姓名の云へないやうな人に會へるか、乃公も瀧五郎だ、
 名前を聞いた上、會ふべき人間なら奥へ通し、會はねぬで可い人間
 なら、直は門前拂ひだ、追拂つて了へ、何て人だか名前を聞け 執次「

へエ……エー貴客方のお名前は 安太「イヤ今も申す通り姓名は云へぬ
 者である、面會の上申す 執次「貴方は然う仰しやいますか、此方は然
 うは可けません、名前の云へないやうな人間は門前拂ひにして了へ
 名前を承いて來ないかと云つて、親方が怒つて居ます 安太「なに、解
 らない野郎ぢやないか、此の方は怪しき者ではない、無心合力な
 に來た者ではないわい、瀧五郎に會へば分る、姓名は申すことはな
 らぬ、疾く執次「執次「オイ、誰れか來て呉れ、乃公獨り叱られてゐ
 る、親方には小言を吃ひ、このお武家には叱られ、こんな馬鹿々々
 しいことではない」と泣き出してゐる、この時片傍に居りました彌助
 といふ男「これは旦那、私は瀧川組の若い者で彌助と申しますが、
 成るほど旦那様の方には仔細がおありなすつて、親方の瀧五郎に會
 つてからお名前の名乗らうと、斯う仰しやるのでせう、が、親分の
 方でも、ア詰まらない吹けば飛ぶやうな町人でも、斯うやつて宅
 を排へて居りまする者でござります、何だか名前も分らぬお人にや

水主木鈴

ア會へないといふ、これも親方の云ふのも尤もでござります、且那様の名前が申されませんければ、斯う云ふ用事であるが、今詳しいことは云へぬので、會つて話をするからとか、そこを艶を着けて仰しやつて下さらぬと、執事の者は大きに困りますのでござります、で何う云ふ御用ですか、親分に成代つて此の彌助が伺ひますか、何様な御用でお出でになりましたので安太成るは、ヤツ然う云へば申す、此の方も敢て威張るといふ譯ではないが、誰れが聞くまいものでもないから、主人の名前と拙者の姓名だけは申し兼ねるが、瀧五郎の親方といふのは、義侠人のある人だから、他人から物を頼まれたれば、必らず引けを取つて下さらぬといふことを聞いて来たのだ、全くお頼み申したいことがあつて参つたのだが、何うか是非面會を許して貰ひたい彌助へエー、ヤツ解りました、それなら分つて居ります……エー親方は瀧五郎何だい彌助、彌助武家が兩人來まして先に友の野郎が執事やアがつたら、あの野郎は香鈍漢ですから、

水主木鈴

云ひやうが悪うござりましたが、何處かの御藩中ださうですが、主の名前も自分の名も、誰れが聞くまいものでもないから少し云ひにくい、親分様にお目に懸つて御相談をしたいことがあると、斯う云ふんです、何の事かは知りませんが、構ひません會つてお遣りなさい、瀧五郎然うか、さう云やア分つて居る、唯名前は云へないが乃公に會はうと云はれた丈ぢやア、會へないぢやねか彌助ヤツ御尤もでござります、何うしませう瀧五郎ア兎もあれ通して呉れ彌助へエ……且那、此方へお通りなさい安太、大きに邪魔をした」と初めの勢ひに似もやらず、奥座敷へ通つて來ると、瀧五郎は「さア旦那、其處では話が出來ません、何うか此方へ、いま若奴の言葉の間違ひで、失禮をいたしました、私がお訪ね下さいました瀧五郎でござります、お初にお目に懸ります作十ヤツ、これは申し後れて失禮、手前共は伊豫松山の藩、此方は服部作十郎といふ安太拙者は山本安太郎といふ者でござる瀧五郎ハア左様ですか作十親分、實はお前さんの

名前前は雷の如く聞ゆる居る、これは甚だ身勝手な話で、お前さんが尋常に聞いて、それはお前が悪いと云はれるやうなことで、モウ指を唾へて引込ひより仕方がないが、癪病者患の瘡痂み、泥棒の逆怨みといふことがあつて、悪いながら他人を怨むこともある、世にさまざまである、實はな、昨日此方共は櫻宮へ行つて、少し酔つて居たところから、町人の娘共と挑發つたんだ、瀬五へエー成るほど、作十、ア酒の上の興で挑發つた、ところ共其の町人といふのは、お前も聞いて居るであらうが、長堀橋の南詰に替屋といふ大きな金物屋がある、其家の娘である、その娘の兄弟が、名前は知らぬが十九か二十歳格好の若い奴で、大層強い、此方も酔つて居たところから彼れが爲めに投げられた、殊に此の山本は川の中へ取つて投げられ一二町流されて、やうく船の者に助けられたといふやうな不細工な有様、また他に二三名の連れもあつたが、それらも彼者に取つて殺げられたといふやうなことぢや、見ともないから逃げ出して、天

満橋のあたりまで来ると、替屋の悴といふことを知らせて呉れた者があつて、棧に分つた、此方が乗舟出して彼れを打擲すれば、なに仔細はないやうなものだが、二度の遣り損ひは誠に不器用だ、何うであらうか親方、甚だ是れは無理なことぢやが、併し無理ぢやと云はれると、拙者の方で誠に困る、何と其の若漢を、生命を取らでもないが、一つ腕を挫るとか足を折るとか、不具にして貰ひたいと思ふのぢや、何うか一つ骨を折つて下さるやう、お頼みといふのは是れぢや、瀬五、そりやア旦那困りましたな、へエ成るほど、それぢやア主人の名前も自分の名前も云へますまい、マア今松山の藩だど仰しやつたが、執次の前で云つて、他人に聞かれたら面目ない、これを誰れが聞いたつて笑ひます、お話の様子で見れば、ア其の身が家の世の悴は姉なり妹なりがあるといふ、して見れば、ア其の身が家の世をせしなくつても、替屋の家に迷惑はありますまいが、其の子が獨り子で、それが死んだとか又は怪我人にでもなつて、家が嗣げない

水 主 木 鈴

といふやうなことであれば、替屋さんに濟まないから、私やア其の手傳は出來ないが、姉妹があるとして見れば、養子とすれば處理するに餘計なことですが、私張も矢張り其の通りで、他人様の荷物を運んで働いて居れば宜いのに、少しばかり柔術を習つたり劍術を學つたのが病み付きで、町奴だとか部屋者だとか、今ちやア少しは瀧五郎と云はれて、大阪の人に顔を知られたのが大きに災難、ヤッ宜うございませう、旦那のお頼みとあれば、斷ることも出來ませう、マア悪いのは承知でお仲間に入らませう、先方の忝が何處か往來でもする時があつたら、一つ酷い目に遭はして遣りませう作士、何か何分頼む、甚だ是れは」と差出したは金包み瀧五郎、且那、そりやア可いね、お前さんが金包みを持って來て呉れた、そこで瀧五郎が味方をして替屋の忝を打つたといふやうなことであると、いよいよもつて面目な、ようございませう、錢やア四文も要りません、私も

水 主 木 鈴

斯ういふことを頼まれたのは身の災難と諦めて、一番その若漢を相手に追つて見ませう……コレ、お茶でも汲まねか、何をして居る……何ぞ旦那、今から斷つて置きますが、金子を持って來て斷られたから反物を持って來るとか、或は酒肴を持って來たとか云つても、決して受取りませんよ、それは今から斷つて置きます、その代りお屋敷へ出ましたら、腹が飢さやア飯も頂戴しませう、お酒も戴けば泊めても貰ひませう、また此様な陋苦しい宅ではございませうが、お通りか入りやアお寄り下されて、飲んで頂いても宜うございませう、この包金だけはお断り申します、この儀ばかりは悪しからず何うか思召して下さるやう作士、さう云はれて見ると實に愧かしい譯合である、ヤッ宜しうござる、何分お頼み申す、一旦出した金包みをお引込めて、悄然として歸つて了つた、跡で瀧五郎は、妙なことを頼まれて替屋には氣の毒と思ひました、彼が斷るといふことも出來兼ねて、そこで若い者に吩咐けまして、彼の長堀橋の界限に張りを出

して居る。新三郎は斯かる悪黨の計略ありとも知らず、父の代理を勤めて金子を受取りに参りました途次、彼等の計略に陥つて、既に一命も危きところを、豫て神免重助から習ひ覺へましたる劍術、或は柔術の徳に相つて、その難を免れましたが爲めに、執念深くも彼等は尙更新三郎を狙つて、六月の玉造の祭禮の節に、又再び彼れを殺さんと謀る。この時に至つて主水は櫓屋に思のありまするが故に新三郎の必死の大難を救はん、その場へ駆け付け、圖らず神免重助に面會、これが爲めに仇三平は江戸表へ参つたといふことが相分りましたるに依つて、主水は再び大阪を後に、江戸表へ立歸り、自分の仇を討たんとする其の以前に、許嫁の女房糸に面會いたして、彼の父尾崎右膳が島本準太に撃たれたと云ふことを聞いて、實父の仇討に先だつて、大に岳父の仇討の爲めに盡力をするといふ、彼のお糸が吉原橋本屋から白糸と改名して娼妓になつて居る因縁から赤阪桐島の仇討、これを名づけて兩父の仇討といふ講談、なか

鈴 木 主 水 (終)

長いことわざいまして、到底本編一冊を以ては申し上げ難せません、依つて篇を襲ねて、後篇を「橋本屋白糸」と表題を下し委しく申し上げますから、出版の上は相變らせなう御愛讀のはどを、偏に希望いたし置きまする。

明治三十六年六月廿五日印刷
 明治三十六年六月三十日發行



〔附與水主木鈴〕

發行者 大阪市東區備後町四丁目卅八番邸 中川清次郎
 印刷者 大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地 井下幸三郎
 賣捌所 大阪市南區心齋橋安堂寺町南入 田中宋榮堂

發賣所

中川玉成堂

大阪東區備後町心齋橋筋西へ入

中川玉成堂最近出版廣告

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 福嶋内亂記 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 福嶋三浪士 正價廿五錢 郵稅六錢	東光齋煤林講演 丸山平次郎速記 元和三後日譚 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 壺阪の澤市 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 中將姫 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 良辨杉の由來 正價廿五錢 郵稅六錢
神田伯龍講演 丸山平次郎速記 客觀音丹治 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 小天狗小次郎 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 櫻田騷動 正價廿五錢 郵稅六錢	田邊南鶴講演 浪上義三郎速記 櫻田騷動後編 正價廿五錢 郵稅六錢	親鸞聖人御一代記 正價卅錢 郵稅六錢	松林若圓講演 鈴木喜平速記 蓮如聖人御一代記 正價卅錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 大岡譽政談 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀齋講演 丸山平次郎速記 浄るり阪大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 平井權八 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 法華長兵衛 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 櫻川五郎藏 正價廿五錢 郵稅六錢	東光齋榊林講演 丸山平次郎速記 妹脊山實記 正價廿五錢 郵稅六錢
神田伯龍講演 丸山平次郎速記 孝子 五郎正宗 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 高野山大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	旭堂南院講演 山田都一郎速記 大安寺堤 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀齋講演 山田都一郎速記 眞力庄吉 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀齋講演 山田都一郎速記 日井武勇傳 正價廿五錢 郵稅六錢	東光齋榊林講演 丸山平次郎速記 鈴木主水 正價廿五錢 郵稅六錢

中川玉成堂最近出版廣告

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 福嶋内亂記 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 福嶋三浪士 正價廿五錢 郵稅六錢	東光齋榊林講演 丸山平次郎速記 元和三 日譚 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 三十三所 壺阪の澤市 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 三十三所 中將姫 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 三十三所 良辨杉の由來 正價廿五錢 郵稅六錢
神田伯龍講演 丸山平次郎速記 俠客 觀音丹治 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 俠客 小天狗小次郎 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 櫻田騷動 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 田邊南鶴講演 浪上義三郎速記 櫻田騷動後編 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 親鸞聖人御一代記 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 松林若園講演 鈴木喜平速記 蓮如聖人御一代記 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記
大岡譽政談 正價廿五錢
郵税六錢

玉田玉秀齋講演 丸山平次郎連記

淨るり阪大仇討 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

平井權八 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

法華長兵衛 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

櫻川五郎藏 正價廿五錢
郵税六錢

東光齋榊林講演 丸山平次郎連記

妹脊山實記 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記
孝子 **五郎正宗** 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

高野山大仇討 正價廿五錢
郵税六錢

旭堂南院講演 山田都一郎連記

大安寺堤 正價廿五錢
郵税六錢

玉田玉秀齋講演 山田都一郎連記

小原眞力庄吉 正價廿五錢
郵税六錢

玉田玉秀齋講演 山田都一郎連記

小金原白井武勇傳 正價廿五錢
郵税六錢

東光齋榊林講演 丸山平次郎連記

鈴木主水 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記
三國 **玉藻前** 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

三代記 享保大仇討 正價廿五錢
郵税六錢

東光齋榊林講演 丸山平次郎連記

大江山實記 正價廿五錢
郵税六錢

東光齋榊林講演 丸山平次郎連記

大江山鬼賊退治 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

相馬大作 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

伊達三次 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

關良助 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記
元和 **戸田新八郎** 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

石川紋彌 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

田宮小金吾 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

廣嶋大仇討 正價廿五錢
郵税六錢

田邊南院講演 加藤山太郎連記

新大橋仇討 正價廿五錢
郵税六錢

旭堂小南院講演 宮本松三郎連記

鎗の權三郎 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎連記

黒田騷動 正價廿五錢
郵税六錢

神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 越後關根彌次郎 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 栗山大膳 正價廿五錢 郵稅六錢	旭堂南陵講演 山田都一郎連記 ● 俠清水次郎長 正價廿五錢 郵稅六錢	旭堂南陵講演 山田都一郎連記 ● 客黑駒勝藏 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 奇牛若若太郎 正價廿五錢 郵稅六錢	松月堂吞玉改 東光齋榎林講演 九山平次郎連記 ● 紀伊國屋文左衛門 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 永井源三郎 正價廿五錢 郵稅六錢
神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 客花川戶助六 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 關取千兩幟 正價廿五錢 郵稅六錢	旭堂小南陵講演 宮木松三郎連記 ● 高田又兵衛 正價廿五錢 郵稅六錢	石川一口講演 九山平次郎連記 ● 探松平慶承 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 奇神道徳次郎 正價廿五錢 郵稅六錢	石川一口講演 九山平次郎連記 ● 女羽衣松 正價廿五錢 郵稅六錢	石川一口講演 九山平次郎連記 ● 河内山宗俊 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 九山平次郎連記 ● 新天神記 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 野晒お駒 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 松平長七郎 正價廿五錢 郵稅六錢	西尾東林講演 九山平次郎連記 ● 海毛剃九右衛門 正價廿五錢 郵稅六錢	石川一口講演 九山平次郎連記 ● 筑紫市兵衛 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 因果小僧 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 奇稻葉小僧 正價廿五錢 郵稅六錢
石川一口講演 九山平次郎連記 ● 幡隨院長兵衛 正價廿五錢 郵稅六錢	大岡政談 九山平次郎連記 ● 遊女九重 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 九山平次郎連記 ● 義雲霧仁左衛門 正價廿五錢 郵稅六錢	大岡政談 ● 天一方 正價廿五錢 郵稅六錢	桔梗おさく 正價廿五錢 郵稅六錢	客關口文七 正價廿五錢 郵稅六錢	伊達お菊 正價廿五錢 郵稅六錢

武勇館藏版
全書

擊

正價廿五錢
郵稅四錢

同
全書

柔

正價廿五錢
郵稅四錢

同
全書

劍

正價廿五錢
郵稅四錢

大阪音樂會藏版
全書

舞

正價廿五錢
郵稅四錢

同
全書

術

正價廿五錢
郵稅四錢

同
全書

尺八獨

正價卅四錢
郵稅四錢

同
全書

五曲獨

正價卅四錢
郵稅四錢

同
全書

銀笛獨

正價卅四錢
郵稅四錢

同
全書

明笛獨

正價卅四錢
郵稅四錢

新う
大

入

正價拾七錢
郵稅八錢

新し
江戸

歌

正價十七錢
郵稅八錢

時代
浄る

理大全

正價十七錢
郵稅八錢

洋装
さわり

百五十段集

正價十七錢
郵稅八錢

南洋
遊藝

大よせ

正價十七錢
郵稅八錢

南海堂湯川先生書
玉成

用文

正價拾貳錢
郵稅拾貳錢

小倉百人一首

正價貳拾錢
郵稅八錢

附書初詩歌○七夕詩歌○女一代の心得草○百人のさし書入



中川

及川

特8
472

097245-000-1

特8-472

鈴木主水

松月堂 榎林/講演

M36

DBS-1084

